あり

十

歌と詞を名ゞをわ

[V. 13]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 13
copy 1
Asian
Japan
Case

2004551302

源氏廿六ヤノ三月より廿七ヤまでを
ちる花雨風やまず。神なりたげまらで日比まるりぬ。
源ん
いとまれけびしきことゝかずしらずきしかる川
さきかるしきれ有(あり)き海は心づかうしもえおぼし
なきずいかませましうりとて都はかへらんことも。
まぐこかるゆうされもなくてハ人まらされるること
こそまさしめ。れこれよりふるき山をもとめてや。
給えしちまましと覚えれまと波風(なみ)はさはがされて
なんと。人のいひつゝへんこと。波の世までいとうる
がろしきゑをやちるがしたちんとおぼしこぐるれ
夢にもしておるじき海なるもれくこゝきけ。まれ
たしきしもとこのふくもまもなくてあけくるく

日りずまそへて京のくもいとゞあぼつるまくう
くるがしこ我ちづらりつるまやとこころぼそう
あぼせどうしらさし出べくもあらぬ宅のこゞれま
いでこちまいる人もるし二葉院（紫）よりぞおかがちま
あやしき姿（すがた）まてそほちあれるみちかひまてゞる
人かるまぞとゞるはらんじ口くべくもあらずま
げ我ひちひ川べきしげのれの衣まむつましう
あぼさるくも我ちがらりうじけるくくしまけ
こころのほどしきしろ此（紫ノ）ふこまはあさましくを
やこちまさころの氣色（けしき）まいとゞさへとづるこちち
しておがめやるうこなくなし

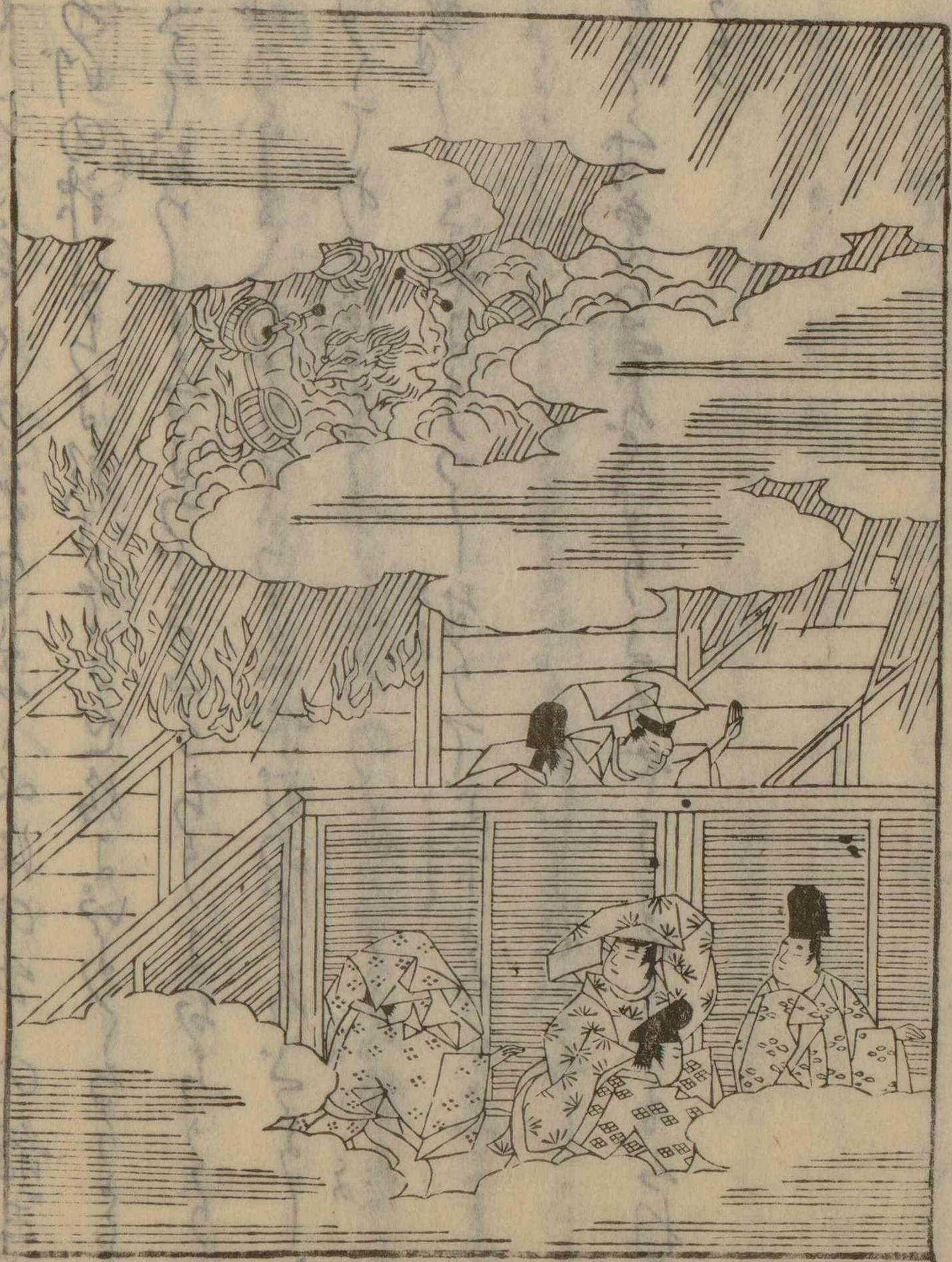
浦風（裳きゝ色）やいかに吹（ふく）らんしひやる袖打ぬらし
なきまなきれ哀（あはれ）まかるしきとゞもかきあつめ
あつり（涼）ひきあつかよりいとゞみぎハまきりぬべく
かきこゝろ寸ゆち志給京（使詞）まもこれ雨風（あめ色）いとあやしき
あれさとしたりとて仁王会（まんわうゑ）なるどとてるいるべし
とるん嘆給しうちまゝり給上遊（うんぐらめ）アなどもすべ
てゐとぢてまつりごともしてるん給ちるど。いかゞ
しうもあらずかくなるしうかたりなすをど京（涼ん）の
かたのことゝおぼをばいぶかしうて。おまへまめし
出てとゞせあふ（使詞）ぐ例の夜のなやこなくゝりて。
風にときゞ吹（ふき）いでゝ日ごろまなりたべるは。

例ならぬことなおどろき侍るりいとうくぢのそこ
とほるぢうのひかりいかづちのしげまらぬことい
ゆらぐりきなどいとじきき海におどろきおぢ
てをるかのいとうしきまも心(涼ん)ぼそさ海さりける
うくしつくよはつきあべきまやとおぼさるくり
其(その)文の日の曉(あかつき)より風いとじう吹(ふき)塩(しほ)さうこちて
浪(なこ)の音(をと)あらきことといちほも山も所るまじきこ氣色
なりうこのなりひらめくさ海さらいちんうこなく
ておちうくまぬとおぼゆるおろうぢうさしきへ
なし我(人々詞)もいかるつきをおりしてうくうなりしき
めぼこうらんちく母にもあひとぼうなりしきめこの

ねをもとで志めべきことくなすげく。恋(深心)れ申こころを
志げめて。なまげりのあやまちまてかこれなぎさる
命(いのち)をばさはめんと。つようおぼしなせど。いと抱さは
がれば。多くのこそぐらさくげさをなて。すこよし
のうこちうきさうひを志げめ海まり給。海ことは何と
をこれなふ神なるらばこすけこまへと。おほく乃
犬(くん)敷をこて給をのくこげからの命をぞさる抱
まて。かうれ身のまゝちまき例(れい)ましげこの如
べきことのいこじうるしさまこころをなこして。
すこし抱(おぼ)覚ゆり恨(うざり)は。身をくへてこれ此身ひとつを
すくひなんとこまこて。まろこ思ま何とけ神を

念じまうで、いワうのかみさまやまやしなされ
まひて。多くのみえしこはなぞがり語しうじ。ふう
きれうけらしこ、おはやしまゝあまのくだび
めりとこもがらをして、おはくうら人語しが。今河の
むらひまうごつらしのそこ海ある波風はかおばれ絶
語らん。天地ともくりのへうさるくてつきまおくら。
つきらしねをされ家をそるれ。ぞらひをさりて。
明られやすきそくるくなげきのすまうくるしき
めはらへこ命つきちんとすがい前の世のむらひか。
はせのとしもり。神はとけおえうりはましい海
ふばふみえうれへやすめみへとこやしろのくるる

むとてさ海ぐの鶴をとて文海の中の龍王（まうゆう）に
ろげの神たちは鶴とてさせ給はいよくなりとぐろ
とており（源）しますまつぐきたりらうにおちかりぬ。
ほのかもあがりてらうはやけぬごろぐましね
なくており恨（うぎり）まどふぎたろのくなり大頻（おほい）姿（との）と
おぼしきやまうつし（かまつ）なりて上下（かうしも）となく立こまて。
いとらうがちしくなきとよむしゑいかづちにも
おとらず。雲（すみ）は雲をすりたるやうまて。目もくれに
なり



やうく風なきり。雨のあしもあり。ほしのひかり
もさゆるゝ。これおまし所のいとめげしかなるも。
いとうたゞけるくて。たんでんまへしうけしまんと
すゝる。やけ物りうるゝもうとましげよ。そこの
人のふとゝろしまどへるよ。こすなどもこゝか唄
ちしてぞり。夜をあしてこそとゝどり
あへるゝ。君(源ん)いはゆんずしまておぼしめぐらする。
いと心あそこくし。月さして。たほのちりくこちち
けり。絵もあらさるゝ。なぐり。秋よをかへる浪あらさを。
某(しぞ)の戸をしかけて。詠(なが)めかりしますちりさせかいる。
ものくちろをしりこゝしゆくさ紀のとうち

おぼしとやうくやとくらぐしうさとうへもるし
おやしきなまどもなどのこうきへおいすり所とて
あけまり年りて字もしり給ふぬことだをさえづり
あへるもいとめづらかなれどえをひもちらぬ
これ(塗ノ内)風いましがしやまざしまりしがしほのぼりて
のうち所ならましかみのるすけなろうなら
ざりかりといふ(源)ぞさく給もいと心ぼそしといへば
なろうなり
(源)海にまゐりこれらすけにうくぐいしほ
やをあひにさずらへるまりし日孫もすまいりもと
ゆ風のさしどるさそいへいうこうじ給に

それが心(ほ)にもあらずうちまどろみ給ひてけるまき
おまし所なれば、こゝよりぬぬへるまゝ院にぞおりし
ましくさ夜なるゞこちのてなどうくあやしき所
まは地すゝぞとて、ゆゑ殿さりてひきたて給ひ、侍(すゝ)吾
の神のこちびき給まくまゝやかなでまして、これ
うし殿さりねとの給ひ守ひ(源)とうれしくて、うし(河)こゝ
ゆかげるつれなりましゝなるゝさ夜ぐりそりしき
ことのこ御ぐ侍れば、今はこれなぎさる男なや、猶(すそ)
侍るましとこそしめへば、ひと(院河)あるまじきこと。
これはこゝいさくかなりまれしむくひたり、ゆれも
くしあるありし時、おやまのことなりしかど。

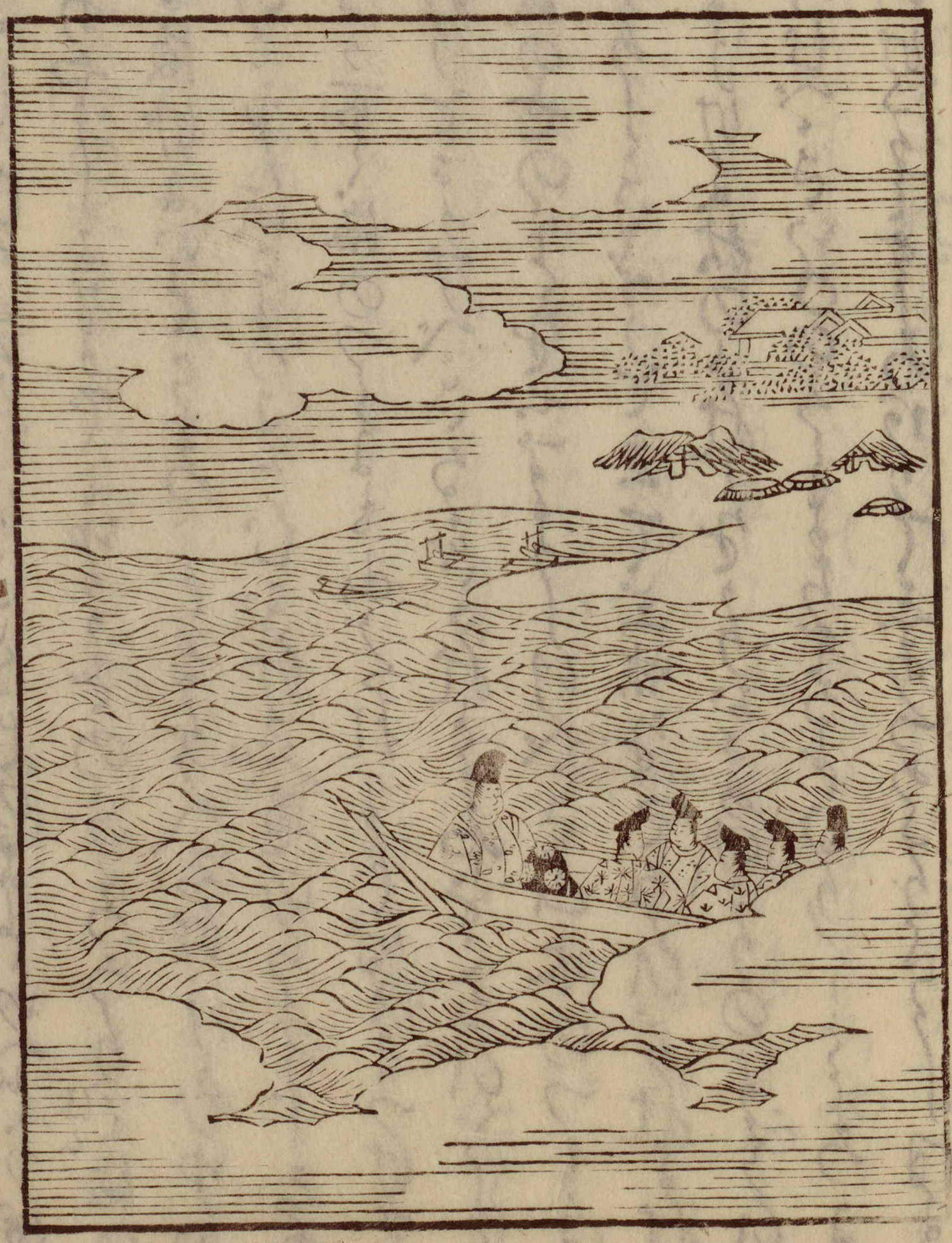
をのげからありしありそれば、そのつゝをあ終ゆる程
いとまるくて、此よ後かへりこぎりつれど、いたじき
うれへに志づむをこゝるまゝへがたくて、うゝまいり
るぎさまのぼりいたくたうじまゝれど、かく程
つゐでにぶいりに奚(そう)すべきとあるまゝりなん。
いそぎのぼりぬるとて、立さりぬぬ。あ(涼)ぎるしゝ
て、此(詞)ともに無りなんとなるきいりなて、こゝ何げなん
れば、人もなくて、月のかゝのことゝかくとして、
夢(ゆめ)のゆちもを、ず此(涼ん)けるひとまれるゆちして、雲(そら)乃、
雲衣(くもあれ)にこれびそりぶしげゆめれうちにもこまゝ
で、迷しうあばつるまされさ夜をほのかなれど

さざうまこまりつゝのこ面(おも)かげにおぼしめて。我うく
かるしこ後とさくあいのちつきなんとしけるは。
こもけまかけるまゐへるとあくれにおぼすまよく
ぞうかさくさぐもをけるとぞ名(なぐり)ぬ事うれし
とおぼし給ことと限(うぎり)なしむねつとふるがりて。中こなる
れ心まどひまぞうつのかるしことともおけられて。
ゆめまもれいしへをいまするしとてぞなりぬる
ことくいぶをさるゑやこ給とことさらにねいる
のへどさらるれめもあらで。喨がるに奴にかる。
なぎさまちいさやかるる無ようをて。人二三人がり。此
こびのれやぎりをさしてくるまゐへなんとしへが。

明石の浦(あかし)より、さ紀(ぎ)の(播ナ前司入道之)ほうぼちの御ふ事よそひて
来れるなり。源(げん)が納言(良清之)さふらひたまひぐ對面(たいめん)して、
こと此心とり申さんといふよしとさよおどろきて、
入道とかくのとくいまて、年ごあひかたらひ
侍つれどけさくしまいさくかあひうしむること
侍てゞとなるをうそうはさぞ。ひさしう
なり侍ぬる代なるこのまゝぞれまいかなることか
あらんとおぼめく。源の御事をすぐるおぼし
あもすることもありて、詞やあへとのたまへぞ。良
いきてあひたりさぐらりわがしかりけり浪かぜま
いつの事にかふるでもつらんと。そろえがたくを

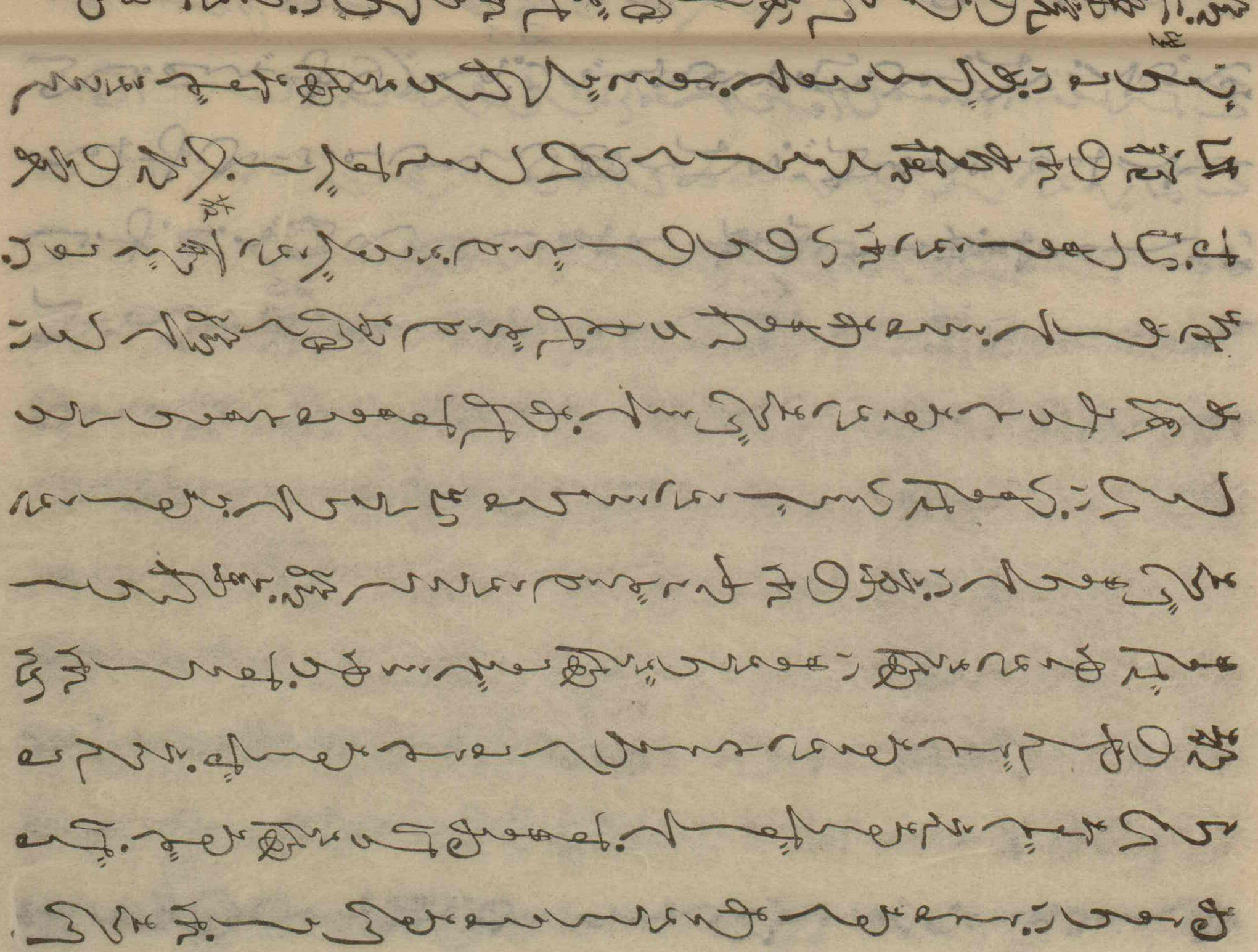
たんり・いぬりついたちのひの夢(ゆめ)は・さ海ことなすなり
もれてつげたしすること侍しかば・たんじがこゝろ
ことくおもひたまへしかど・十三日はあらんなり
たりしことをん・無紙よりそひまうけて・必(うなづ)雨風やまだ
ぬうしはよりもとよりきねて志めすことの侍しかば・
こゝろこゝろふ日のよりそひをまうけて侍侍しは・
いかしき雨風いかづちのおどろかしもぐりつれが・
人のみなどなりも夢をたんじてこゝろをしすくり
さぶひおほう侍けりをもちねさせ給ひぬまでも・
これいましめれひをすぐさず・これよりしをつげや
侍らんとて・舟いぐし侍つるおやしき風ほそう

我よりよそひまさりもしいろねたくとさきの
よを今ひとさはまさりへにはなびきさしるがひてさ
心むけ我ことなべきもれなりしりぞうさてとがか
しとこそすうしのさうしさへもいひ無(とき)れげる
うくいのちをさいめとよる又なるさめれ限(うぎり)をこれろし
けざしるのちの何とれなる我ハずくとてもらけさ
こともあらじゆめれ中にもちくみかどのれを
しへありつれバまるなるまごとをうるがたんとお
ぼしてれうりのまふ志(深詞)ぬ世界(せかい)りめづらしさ
うれへのうざりうつれど都のうこよりとてことひ
をこすりへもなしらじ此来なるさ重の月日の



さびしひかる猿はうくしときさのおとりへだつる波
あやしきまでにゆうぞのこころあるりだる海の
さ海げないところしとあるり人志げりみゆるか
のこるんかれころなそむこさけり入道のらうじ志あ
かゝる所は海のつらなも山がくれなもしばらくはつけて。
けうとさうすべききぎされともやさこるひとゝて
後の世のことをおもすましりべききさ山林のつくは。
いみしきさびうを立て三味ほとこるひこれよれ
まうけは秋のこれゝをうりおさめのうりのよすらひ
けむべきいよのくうまちだるぞおりくところは
けけるこどころけりて志あつめうらうし侍は

おぢて、これぞろむとめなどは、とんべのやどよう川
してすまをそれば、これも海のうちよころやすく
おりします。舟よりは車になりうつる。ほど。日。やう
くさしのぼりて。河（入江ハ）のうよこなるより。巻（おひ）もひとれ
よしひのぶる心ちして、思ふこゝろえて。まづ住よしの
神をかけぐおがこなる。月日の光なるよこえなり
さる心ちして、いとあるこつうまつる。夏（こと）ことゝり
なり。前（源ハ）のさ海をばさしよもいさず。川くりあしこう
こゝろぞへ。求立（こぶら）してい。前栽（せんざい）などの有様。えもいも
ぬ入江の水など。思ふらば。心のいうりすくあるらん
思しいりきとよふまじとこゝ。月ごろのはもま



給二条院のあれ如しほど此ゆかりはうきもや
つと給ちずうちをさくなしのごひつゝさてし給
此氣色る紙ことなり。久内うすくいうじきめ此恨を
こゝろしもてつかりさ海なれば。いまはとよ紙さひ
もるゝ心のこ海さり給れど。うぐこ紙こてもや
のあひし面かげのもるゝよるゝさをぐ御ほう
るゝがしやとこゝろうるしこさ海ぐのうれり
さはさしをかれて
源
もろうまもおもひやるかれしらざりしうら
よりをちに海づひして。夢の中なる心ちのこ
してさめもてぬほどいかまひがことおほかんとそ

こゝろとるすくかきこゝろぞりのへ分しもぞ。いとゝ海
ほしきそぞしめなる俗。いとこゝよるされ心ぞしの程
と。人ぐこゝてまつる。地をのく嘉（ふつさと）は心ぼそげなる
ことつて。そんべかめりをやこゝなりしそこれ氣気。
名称なくすこつりて。あきりすゝ何まどもほゝら
志げなり。淡まはいと心ぼそくて。何まれいとやも
まれなりしを。人しげきいとひハ志給しかど。
こゝそ又さ海ことは衣なることおほくて。よろづは
おぼしなぐさまるおりじれ入道をこるひ川とめしろ
さ海いうじうせすゆしろ俗ゝごこれ娘（むすめ）ひとりを
もてワづらひしろかしさ。いとゝこゝろいてきまで

ときぐもしられ人字ゆ法(ほん)心ちりまぎれおりしと
ゑそぢき給し人なれバかくおぼしなして光ぐり
おりしるもさりべき契ありやとおぼしなるゞう。
なほかうこゝろ浅げめくろほどなどこなひより外の
ことはせりげ給の人もしづなるかりてひしま
さぶらふとおぼさんも心ちづしうおぼさるれバ氣
多ぶち給ふくなしぶとまふれてこゝろざき有様(ありさま)
なべてなるもすもまけつれとゆりうおぼされぬ
ましもおしふず。入道るくま尽りしこまりてすげうくも
おさくまいしず。まれへいやそうりしまのやう
きみ宮さうハ何もられこ共にまほきり。あつぎ思

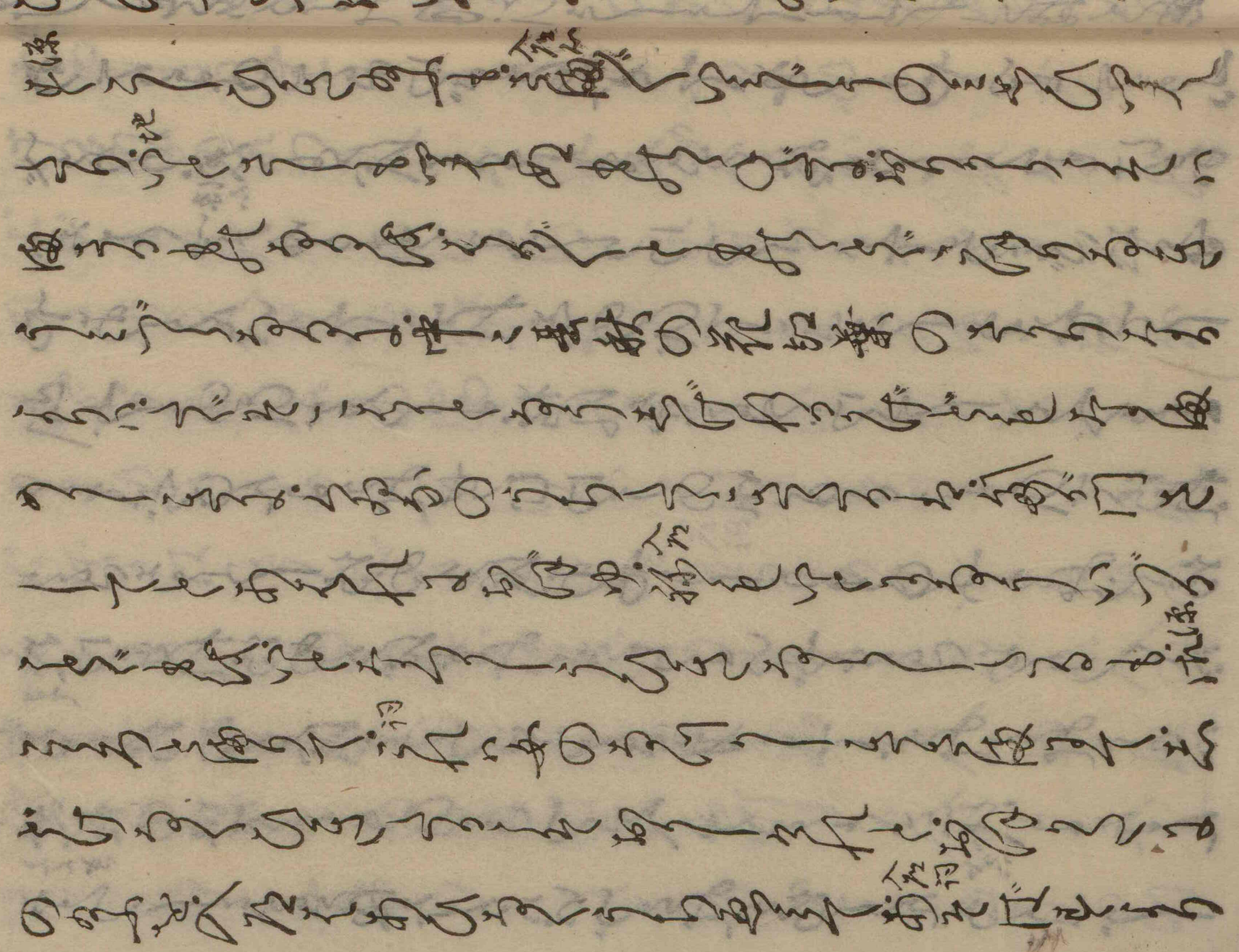
ゆえていりでおもふ心をかるへんとほとけ神を
いまくもんじこそまつり年ハ六十ぢりり
なりこれどいとこまげよあしまほしうなこなひ
さしぼひて人のほどのあてたかなれバやあしん
うちひがこほきぐしきことハあれどいかしへの
ことをもこしつまてもれきたなりぞよしづきこう
ことをもうじれくがむりしの物語などをきせて四文のふま
すらしつれぐのまぎれなりぞ（添ノ）しごろおほやけ
ひこそしれいと夜なくてさしもきく亜（とき）のうぬよれ
かうこじもぐ（入左）づしいでくさしもぐ（添ん）うろ所なとも人を
もこぞらまりしりばさうじくしやとまでげう

ありとおぼしてことも、まじかりうそなれとこと
れどいとけなう心もづしきれ有程は、さこそ
いひしがいくましうなりて、けがしふことはこゝろの
まゝまもえうち出事しぬと、心もとなう口おしと、
そくぶらいひあはきてなげく、さうじこも、なし
なべての人ぶるめやすきはこゝぬ世界は、よくよく
うゝ人もおりしかりとこなりしまつけて、月乃
程しられていとちかうまぞ出事しけり、おやこちの
りくしひあつふをきくまもなげるさことゝなと
しつまじぐるかよりは抱衣なり、郎月はなり也、
衣が人のれさうぞくこ怯のうるびらるどよしあり

さ海に志いげよろげにつうまつりいとなむをい（添ん）
とおしうすぐろなりとおぼせど人ざ海のあく
までさあがりうさ海のおてなるにおぼしゆるして
こ給京よりもうち志さりころれとふしひだこゆこ
なくおほかりのどやかなるゆふづく東に海の上く
もりなくこしつれるもすこなれのひしふるさとの
いけ水に志まがへられのまいたんかたなくこひしさ
こといづるともなくけ来なるさ心ち志のすてこぐ
めれまへにこやしるくはおもちぐ鴻（去ま）なるまりおもと
なるまなどの給て
（添）あるところ河まちぐの鴻のあれさへ海のら海

おもとゝ[illegible]の[illegible]
なすくさゝめりよれ相ひさしうてもふれし海も思
こゝんなふくろよりも出(とりぞ)ぬてけるくかさなるし
ぬへるれさまにごとてまつりへもやすらず哀に
なるしうしあへり。廣陵(かりれう)といふてをおろかぎりひさ
すましぬへるよかれをうへの家も松のひぐきなるこの
春まあひて心ぢせあるけるきへハ男ましてしふ
べかめりおるまともこゝくけるまじきこれもかれもれ
しぢふるひべどもしすぐろもしくてお海風をひき
けりくへ道もえらへでくやうほうゝゆこそいそぎ
しまれりさしるまむこゝうし世の中もせりへしし
然めべく侍り後のよるねがひ侍り前のあるさ海も。

さふらまへやしらくこれさ海れとなくくめでさ
しも。ワが(涼ん)れころろまもおりくのれあそび。それ人れ
人のことふえ。もしいこ忍の出しさ海。時々ほけ
て。よるまめでられぬひしおりさ海。みなどよるもも
じめなりて。もてうしづきあがめられなり給しな。
人のうへもワが(れ)力の有様もおぼしいでられて。
夢のうちし給まくまきなるしぬるこ忍も
ころすぐく字ゆふべいなるぞこもと見んあへず。
とうべまびもさうのことさりまやまて。入道びし
の法(かう)しまなりて。いとおりしう見づくしうて
ひとりさつ行いでしたり。さうれ(れ)琴(こと)まりられば。



なつしきき夜なりハいづれか侍らん。なるまがし
延喜(えんぎ)の御てよりひきつゝへたること。三代(ざい)まなん
なり侍ぬる後がうつるなるき身まて。これよれことハ
枝(まて)口をれ侍ぬる後おもひきちまいぶきさなりくハ
かきなるし侍ぬる後おやしうまゐぶもれく侍
こそだゐんまかれせむ口うの御まゐまかりひて侍れ。
山がしのひがんくまゐ。松風をきく口うしもべるま
やあらんいかでこれ志のびてきうしめきせてし
がなと。アメゆりまくまゐうら口るゝさてなきぶなき寺
べかめり。志(ほん)ことに後ことしもきく給まじかりとけるか
あらりまゐるきつぎかれとてなしやゆとうまゐふ。

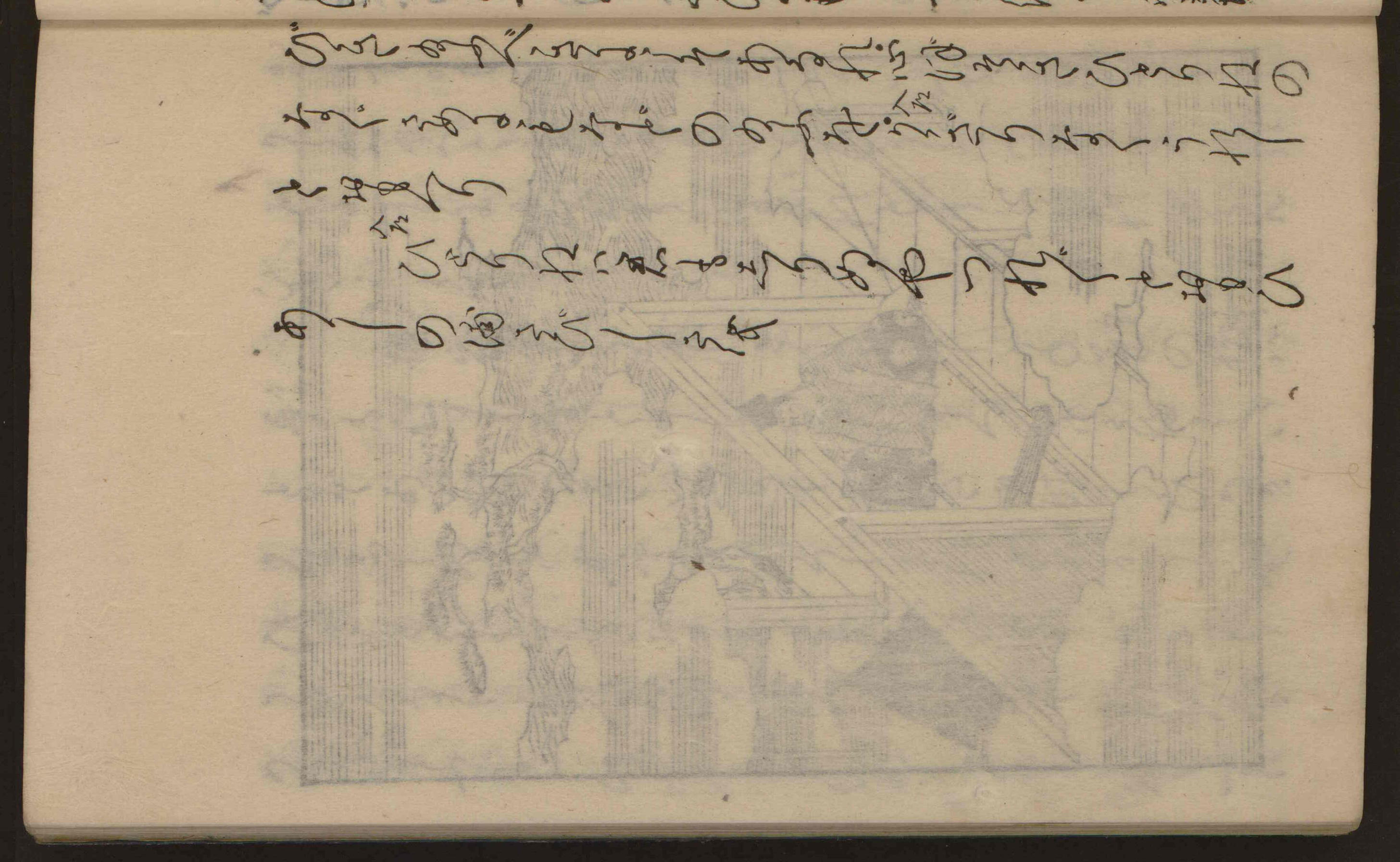
りしさてなどすぢことなるんいりでこどるまかえ
べんあしらさなるこれこゑまもしかるしうも
もふゆへられるがしらさつひりもれなげりしさ海
ざるくありくも侍るなどすさねこれバおりしと
おぼしてさうの琴さりうへて給ちをこりげる
いとすぐしてかいひこさしりいまれよる里めらぬすぢ
ひさつけてまづかいといこうりしめさゆのひふか
うすましこり世の海るしのどこさの紀るゞさる
かやひろりんるどこゑよこさ人ようこちをて我も
時ぐひやうしどりてこゑうちそへ女代合ひこさ
さしつめでこさしも此くぐもれなどもんづくしこさ

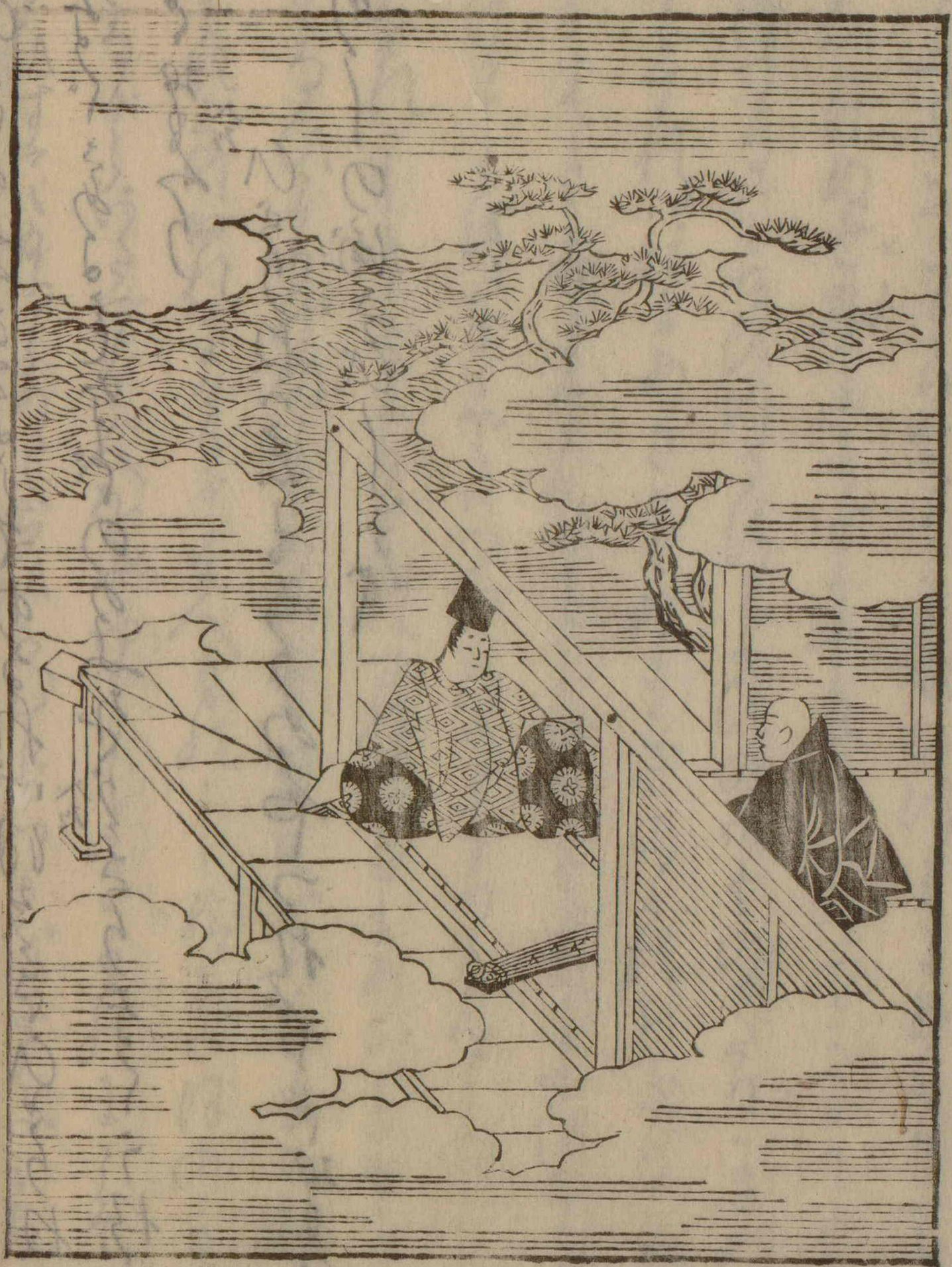
さ海まで無くせ。人ぐまさけしねそしなどして
とのびかくもれ忘れもしぬべきよれさ海なりぺく
かけりまくは松かぎとぐしうて。月も入がくは
なかまくはすさ海さりて。しげかなる程は浦物鎧
のくりなく罪くて。これ海はすさりじめしほどれ
くろづひのちのよ代つとむかさ海がきくげし
罪くて。これむすめれ有積とちずがくりはさ也。
おかしきもれくさすがは衰とさくめふかじくもな。
いとさりやがくさくとなれど我さこうおぼし
なき世界はかりまてもうつろひおりしましくは
もし年ごろおいぼうしのいのりやちべる。神

ほとけのあそれひおりしまして志げしの程御心
ともなるやましなるよやとるんじふまゐるその故は
往吉の神をされこそじめなりて此十八年に
なり侍めぬれ見らいのいとさるう侍しよりじふ心
侍りてどしごろの去秋ごとよかれこやしろに
まつることなん侍ひ家よ家の六時の川とめる
こづからのちち守のうへのひがひなばさるまれまて
さぞこれ人をさうさほいかれへさまへとるん念じ
侍りさうされよの奬(ちざう)つるなくてこそかくくちおしき
山が川となり侍けめおやぞ尼のくらねをこそもち
こまへりさこぞかうくねなれ民(こと)となりてし

べりつぎくさのこおとりまゝんは何の月にか
なり侍らんとかなしくもひ侍をこれもむまれし
時よりこれむ取るん侍がいまして都のこゝろさんは
生らんとしふ心ゆゝさまより俳ぐくにけけて
あまるのそのこをもひこれこめかゝきめ代み
なおりくもお俳く侍れどさらまくるしこと
おもひこまへぞ命のうぎりはをばさ袖にもたぐこ
侍るんがくながらこうすて侍なば海の中にもまじ
ぎうせねとなんおさて侍るなどすべてまゝぶべくも
あらぬことぐも代うちなさくさしも君（源ん）もまれ
をさ面ぐおぼしつゞくるおりからいうちなるべ

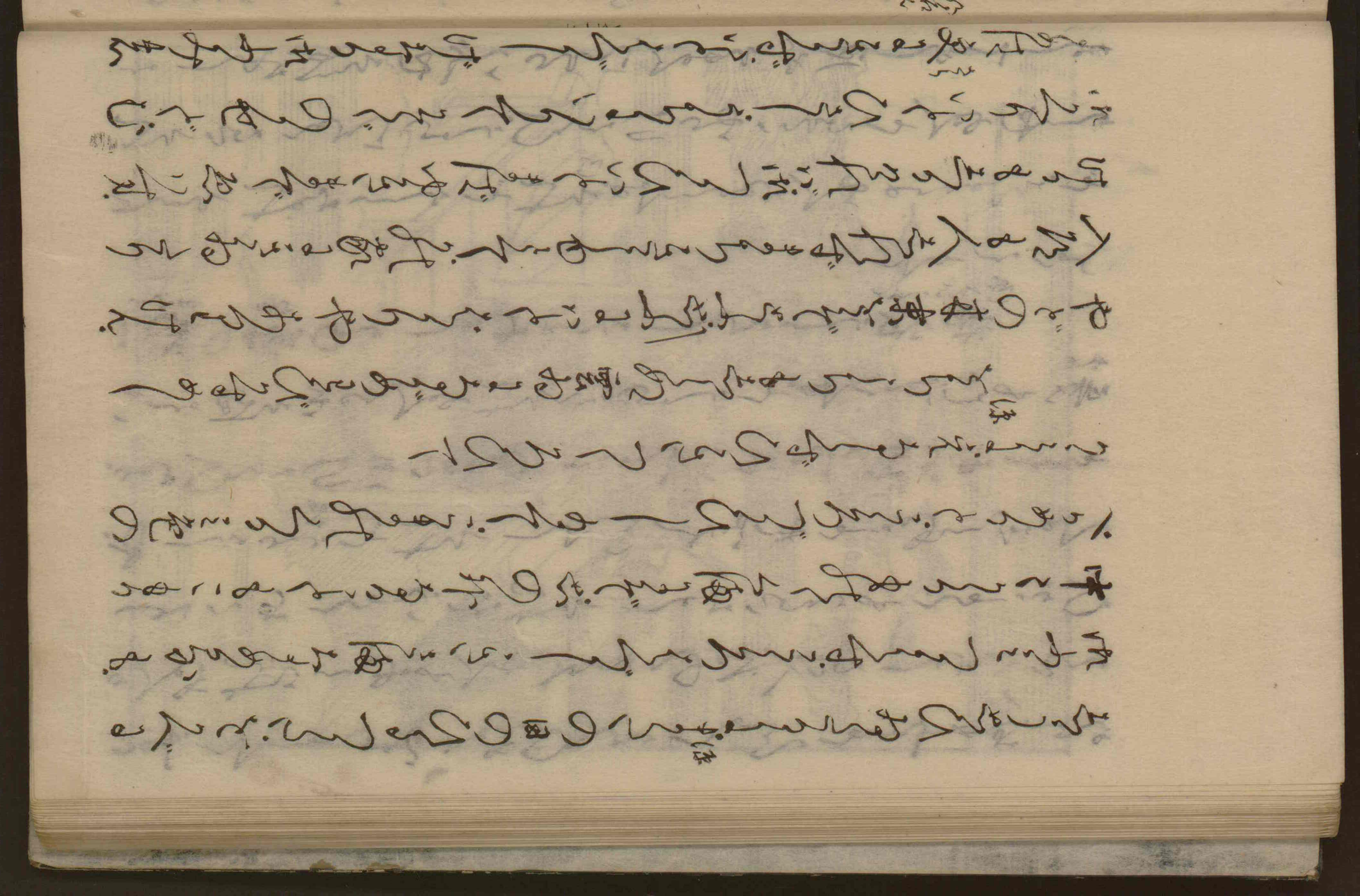
ぶこつてきたしめす。よこさ海のけこうまあたりて
しひかけぬ世界（せかい）はたゞよふもなまのつこまかと
おぼつるくしひけるぼしよひのれものぐりは望
あらすれバげはあさかゝめさきのよれちぎりは
しそてと衣はたすんたまどかハかくさぐかはしひしり
給けることぼいまんでいつげ給いざりつゝん。こやこ
ちるれしときよりよれつねなさもあぢさなう。
をこちるひよりれのことなくて月日をふるは。こゝろ
もこれんげおれはかりがるへもれし給といはのさ
きちるがしいるづらんをバゆくしきもれはこそ
はもひすてゝまふらめとしひろむじつるぼさらバこち

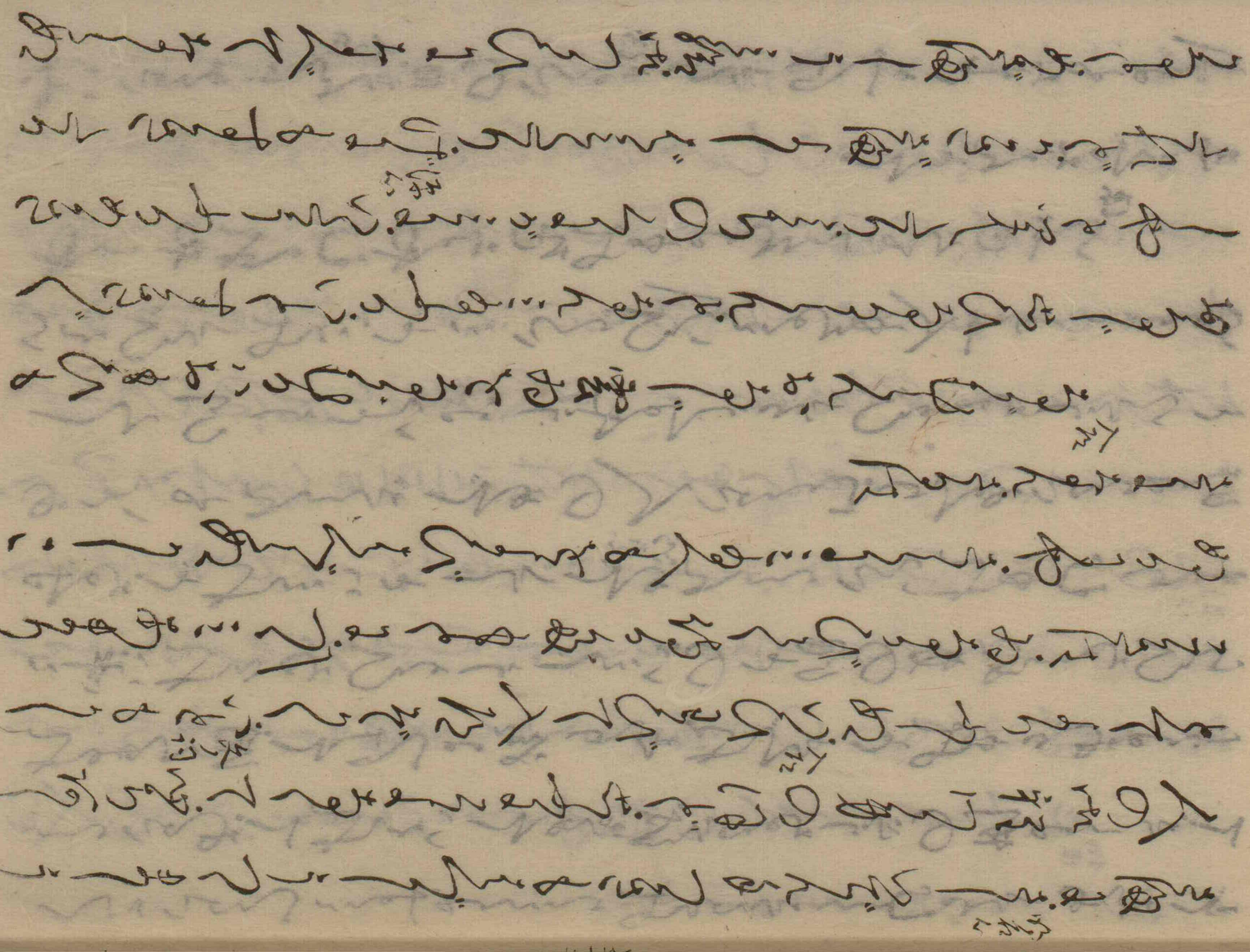




ましてさし月ぶさまへにうらいぶせさぶなしは
うせぬへとこさゝゆりけるひうちにうくさされ
どさすがゆへなるらぶされどうらなれさん
ひとそとて

接衣（添えびこそ）うしかるしさまあしかる○菓（くき）の枕（まくら）は
夢（ゆめ）もむすぐぶとうちうぐれなくるれさ海もいい
とぞあいげつきいつもしなるきれけるひなる
かぶさしあことだ罕くけくしされどうさしや
ひがことぐもうきさしされだいとぐおこり
うるくるしこさ入名のてろぐへもあらはれぬべか
めりぬ（入名）もつとかけぐうるひぬる心ちしてすぐ





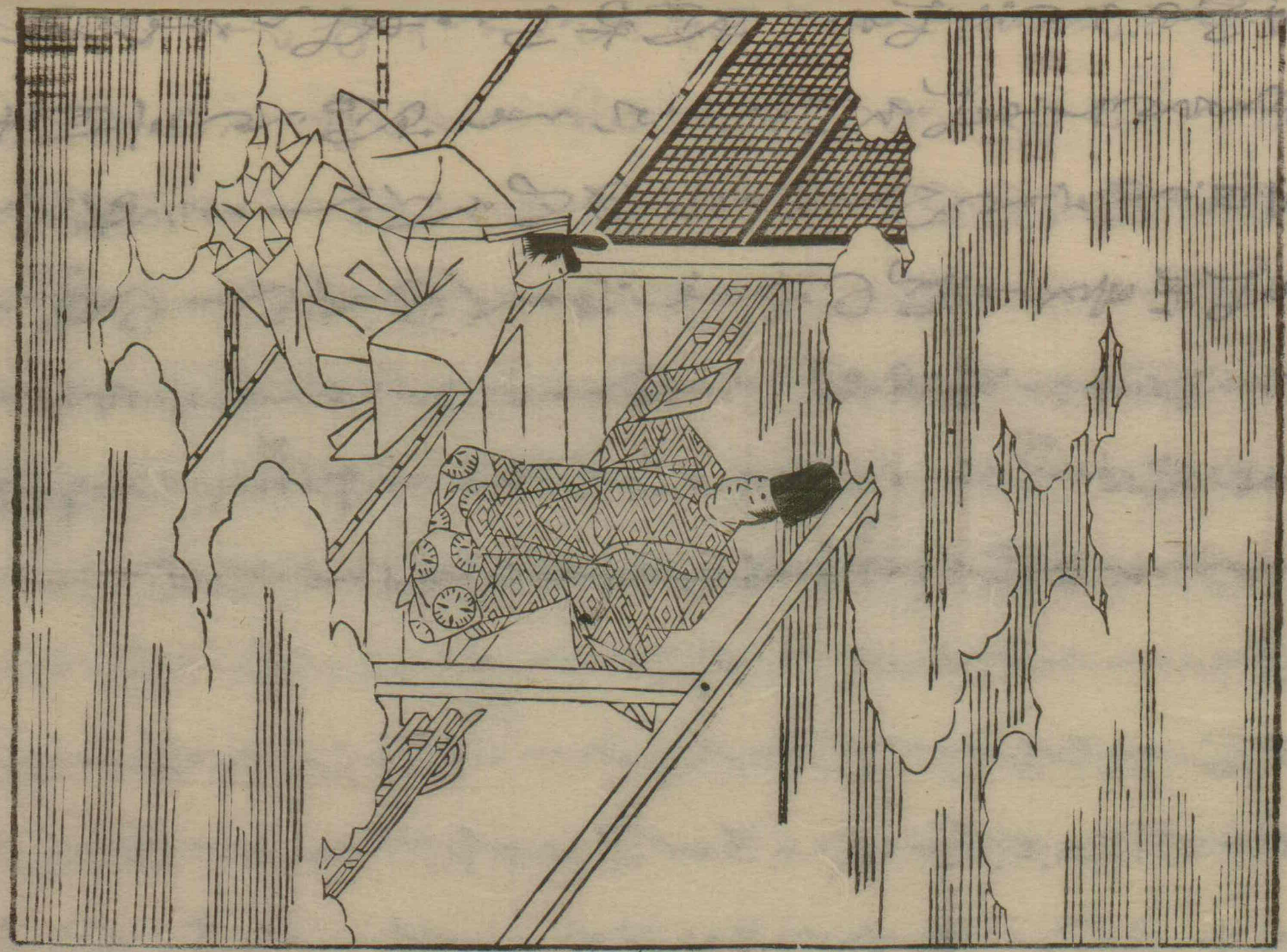
ぐまもなどうづけたり。源まるこの日。さん(文ノ詞)じ。がきはみ
しらずなんとて
源いぶせくもうろまもれなきやむれやらや
いかまとこふ人もなきいひがること。これたびをい
といたうなまびたうすやうまいとうひろく
げまうきあつり。けうきへのめでざらんもいとあ
まりむもれいたうらんめ(汚石ん)でたしといえれどなず
らひなしぬ身の目どのいえじうひかなれば。中こ
しるあるもれとたづねしり給まつけて。泪ぐまれ
てさしる例のごうなきぬきめていたれておきうら
ぐ志めしろむしらさきれりとるまずつきこつく

うすくまぎらはして

昭石 しゆんろうの程やくよいるまぎこぬ人の
ぞかんやまんでのさ海うさうさ海るぞやんごと
なきひとよいうをとらまじうどぞめさうり
涼い 家のことおぼしておりしとこぬへどうちしさりて
つくさむも人めつまし給れば二三日へぞて川く
つれぐなる又嘗もしたまれ衰なる明ぼのなまど
やうままぎらりしておりくひともおるまじ心な
こしまぬべき程どさしたりてうさくらし給ま
まげなるしぎうろかくおもひあぐりさる氣色も
こぞいやまじとおぼしまれからしさまからう

だていひし気色もめざ海志う。年ごろ心づけて
あらんなどめれまへにおもひたぐんもいとおしう。
おぼしめづらされて。人すくこしまらばさら方までも
海ぎらしてんとおぼせど。如(昭)ハこで中こやんごと
なれきいの人よりもいたうさひあがりて。孫こげる
もてなし。罪しられば心ろくべまてぞすぎけり。家(源ん)の
しと後ぐをきへぐらりていよく。おぼつかなく
おもひきたし給ていかるせましふれまくも
あられ志のびてやむ人なりてましとおぼし
まとらおりくあれどさりともらくやそらしとら
さのん。いまさしまへ。けろきことをやいと。おぼし

しげめうりぞれけし。おほやけにもおもくさぶらひし
ありけりて、これさはげしきこと。おほかり。三月十
三日ありてえたまりひとめぐさ。屏風さはげしきさ夜。みち
どれに長夕に院のみかど。おまへの兄りの弟に
うせ給ひて、に気色いとあしうて。みしこ三して
させ給ひなどし法門こもりておもてします。院御九させ給
ことにもおほかり。地源氏のにほひもあまりけりし

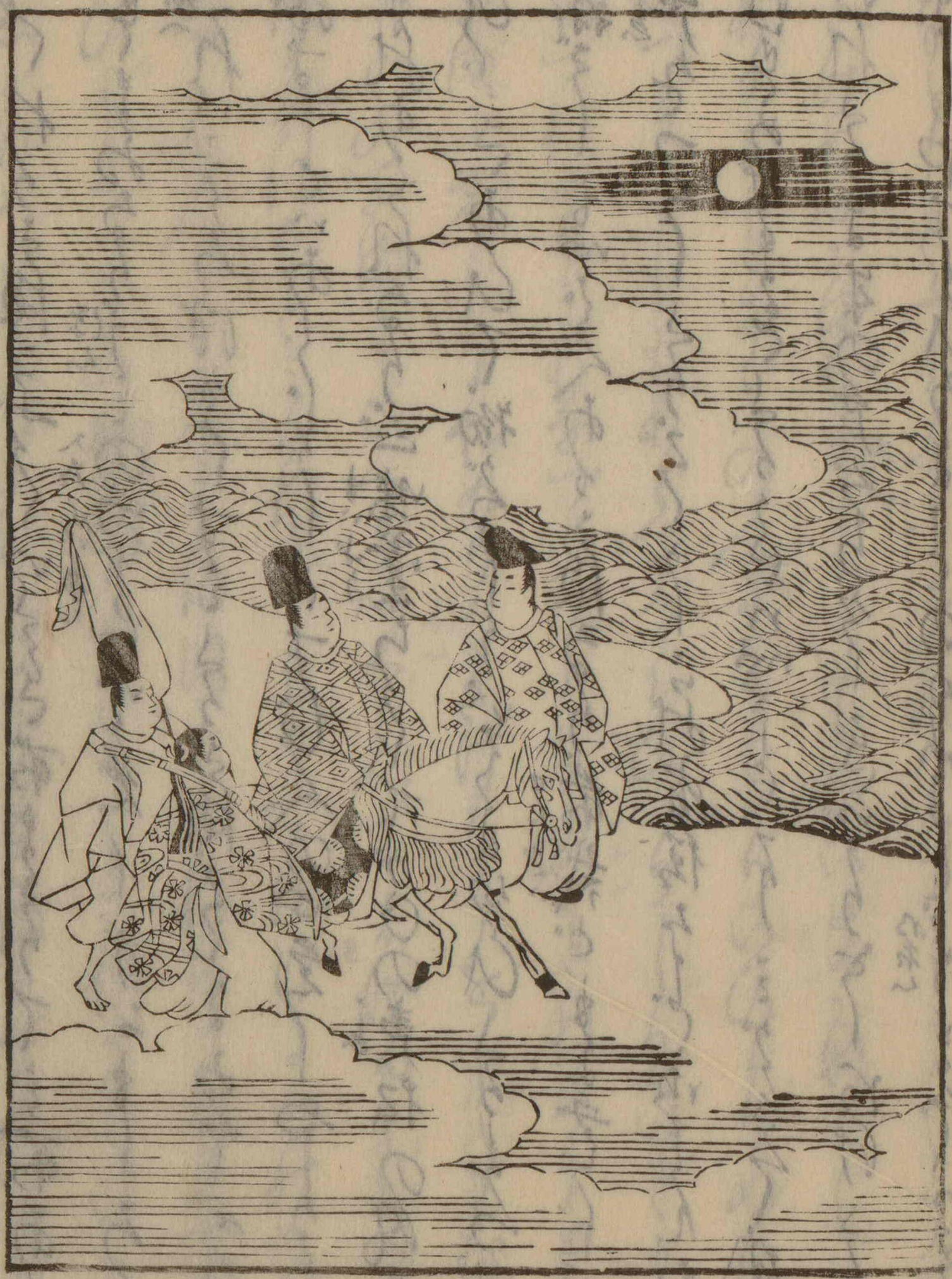


いとおそろしういとおしと思ひて、[illegible]
[illegible]させ給ふれば、[illegible]ほど[illegible]、[illegible]ぞれ[illegible]
[illegible]ることいさぞ[illegible]
[illegible]しおどろくまじ[illegible]さとと[illegible]給ふ[illegible]
しまこあるをあふとこしけるや[illegible]めけづらひあ
て[illegible]へがたうたるや[illegible]給ふ[illegible]しこうちまも
家はもうぎりなくをさせ給ふ[illegible]きおとぐうを給ぬ
[illegible]のれよりひなれどうぎくまをのげら
[illegible]しきとあるに[illegible]やもそこそとなう
けづらひあて[illegible]ばよりう給やうなる。内[illegible]
[illegible]しなげくことさ[illegible]ぐなりなげこれ源氏[illegible]

志度ことるをうすくなるきまてかくしづむならば
うるしぶこれむらひありたるんとなんおぼしこまふ
いまはなほもとのくらねをもゆひてんとこゝびく
おぼしの給を世（勅詞）のもどきうぐしきやうぬべし
つゝるあぢて都をさりし人を三とせをぐるすぐ
さ守ゆかされんことよれ人もいかぐいひつゝ給
らむそぐ（さけき）給ひてういさめ給ふ（清）おぼしとゞかな
ほどる月日かさなりて此なやこどもさ海ぐる
をもりまさしせのふおりしまは例のあきはれ海
風のことなるよ（源）ひどりねもまめやかるよもれまび
しうて八月にもありくらしくらせ給ひ（源詞）しかう

なりて、おぼしくずまへざしんときこゝいろゝなけき
とゝをんとせひやうなゆくしくそめでしきへと
きこもとゝもつくういこじうもあるべきこれめり
こゝぬほとけ神をこのこなりて、人の此心をも
すくせをもしてなどうちかへしせひこゞれたり。
添
君ハこれごろのなこの者にかれもれしもときゝ
ぐやさしずいかひなくこそなどつまいの給ひて、
会
よろしき日こゝをてぐぐ君のごくせひけづふを
きくいれど、弟子ごもるどにしきず心ひとつに
しらぬかくやくぐらりしつひて十三日の月乃
前やうにさしむしろにしてあしらにれと笑しらり。

係 恵はすきのき海やとおぼきどれ為紙しまりひき
つくろひて東ゐしていぞ給れ車ゐまきまくに
くりされど前きしとて此馬まて出給ごれこに
なぞぞうをさふらきを給やくとをくいる所必なり
こちの御どもどもまれ御くこにしまて出ふどち
こまほしきいりえの月かげにもまづこひしき
雲 人のれこと紙をひ出きてしまるやがてむまひき
すぎてどもむきあべくおぼき
係 秋の東のつきげの弱(こま)よけぐこふくもゐる
これ時のまもこんどおひたりごこれ給



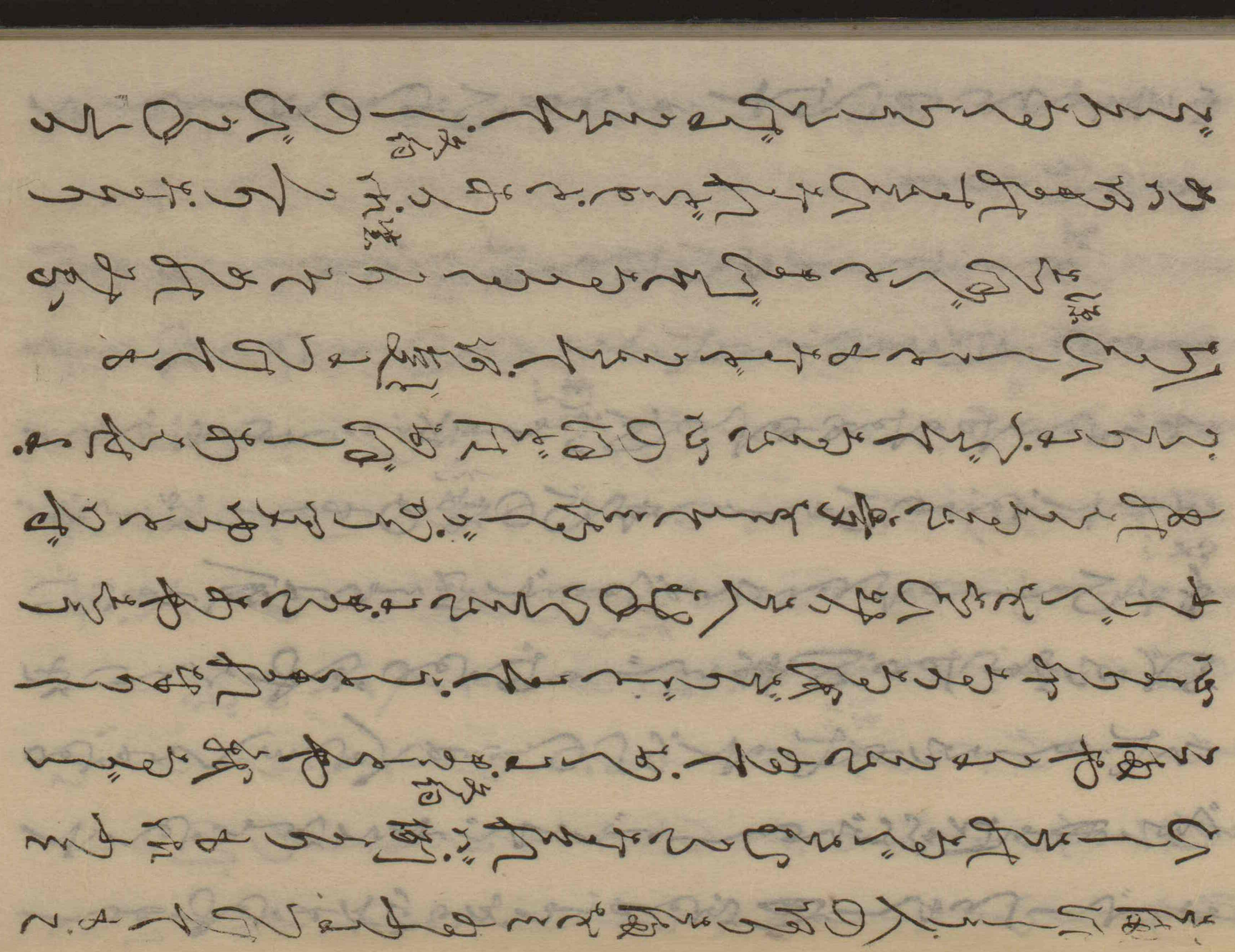
思へ
つくれりさ夜こぶくいこさ前まさりてこゝ前あり
とまねるり。うそ（深ん）のつらいいかゝ見しうおましろく。
思へ
これいこゝろぼそくすこゝろさ夜こゝまねてさひ
御すこといあらじかしと。すむ人の心見しやうま
まれあられるり。ご味堂（まいどう）ちくてかの声（こゑ）松の風ま
ひごさあひて。物がるしういとまおひこゝろまつれ
孫ざしも心ぞんあるさ夜るり。前栽（せんざい）どまま世しの
声（こゑ）をつくしこゝり。こゝかしこれ有様なるぞ。はしんぞ。
むとめすまをこゝろゝは心ことゝり。こゝがきて。風
いれこゝろままの声ぐち。そしてきげりをしなけこゝり。
うしりやすしひるまとのあふまともかりまでいこそ

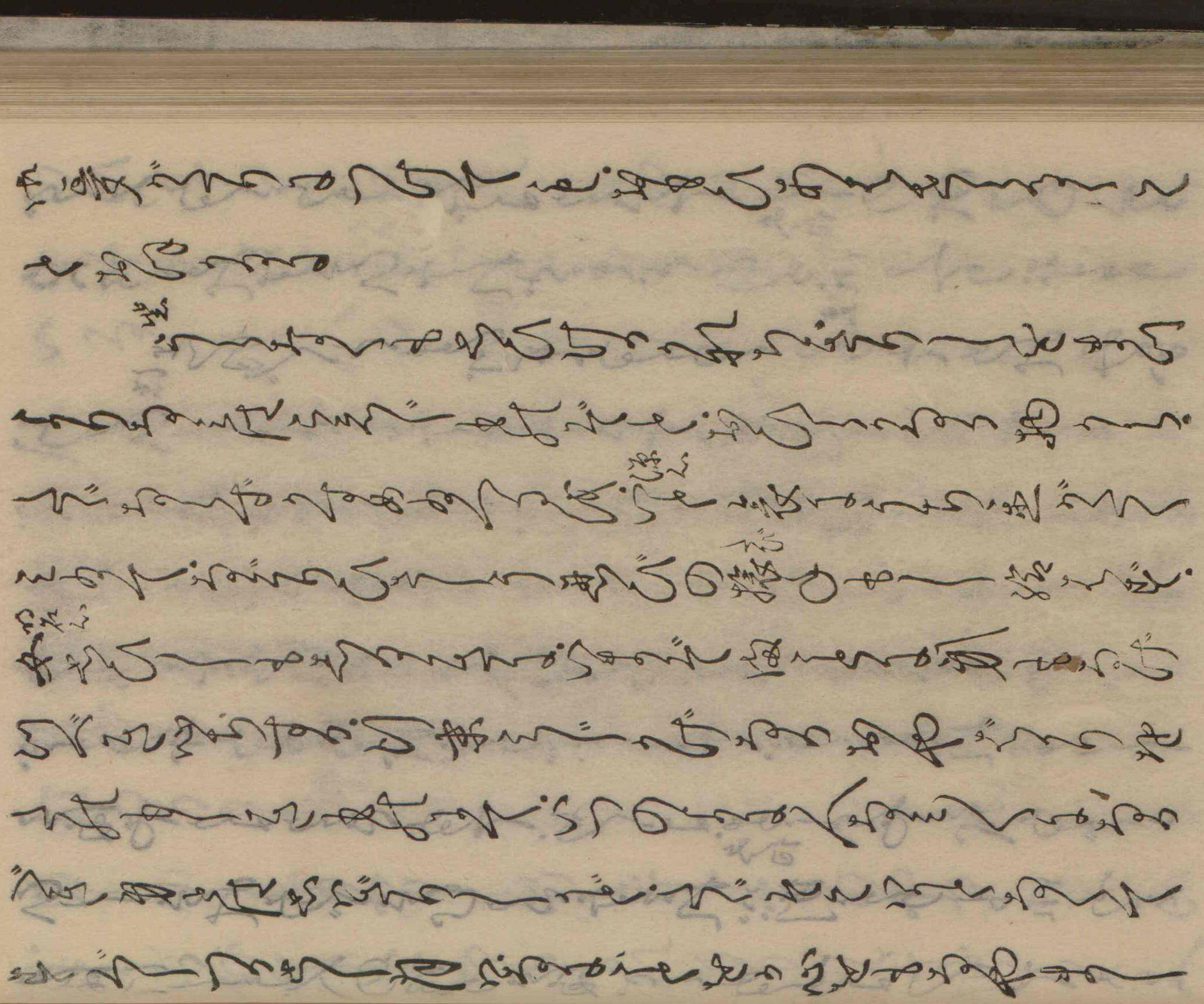
なんじとふうさふまもれなげかしうてうち
とけぬ心ざ海をごとるうも人めいたるれざしを
あるまじきくいの人ざまがぐりいひよりぬれば
心づかうしもあらずなるひたりしをいとかく
やつれたるまおなづらりしきまやとねたうざ海
ざ海は覚しなやめりなさけなうをしたむも
ことのさ海にたぐへり心くらべにまけんとて人
ワクれなどこぞれうしをぬふさ海げにもれさひ
志んん人にしてこを海ほしかれちうき本丁の
ひまさうの想のひきなるされたるもげくひ
志どけなくうちとけなるがらかき海さぐりける程

ことてありしかれば（源）これこそなりしうつゝと後
さへやたまどころげまのあふ
（源）むつごとをかたりあはきんひとしがれうき世
の夢もたまだしさむやと
（吟石）明ぬよまやがてまどへるたろまはいづれを
夢とワきてかたらん（源ん）浪のうちけもひいせのミ
やもぞあいとよう見えしたりなまごろもなく
うちとけてねたりけるぞうしのうちまいりて
ワりなくてぢたりけるぞうしのうちまいりて
いかでかためけりよかいとつゝき後（源ん）志ぬてもなし
しちゝ海もぬさ海なりされどさのミもいかでかは

あらん人は悔をもあてはそびそて心をかけりしこそ
けるひぞあるからあながちなりけり我をおぼえ
まもあさりしなば哀なり。これこころざしのちりまさる
すなをなるべし。つひにはいとほしき夜のちぎりもとく
明めり心ちすきが人はあはれじとおぼえもごろ
おもしろさすて後悔なくしてひききて出あひぬ
れわこいや志のびてぞなきはあらがおもひなされ心志
よまるりや。こ(還)うしはもとなりしにいふでまじきと
つゝそれつひこしくしくも、もてなす恩を。
むねいくつおもう(深)くてのちは志のびりしはごお
まず時がまずうしなふれるまでのづくしまれ

いひさがるまさ何まれこまやたちまじんと思ひ
たゞかる程とざれ（略）ばよとおもひなげきたるをげる
いかるまんと入るも極（ごく）楽ののがひをばまれこく
たゞこれ此乳色を約（こと）髮まは御今（地）さしまたるを
こゞろもいとくおしげなり二（深ん）楽のさ（紫）これ此の
つてまもり字始りんことにたゞれまても心の
（ぞ）協てありけるとさひうとまれまたんに心ぐるしう
たづしうおぼさるしもお（地）かがちなる此心ざしまん
程なりかしうろ（深ん）のことをばさすがまつろ（紫）とぐ
めてうしとあつりしおてぞてあやるきすさひ
ごとまつけてもさおもられまりけんなすぐらまん





けんかういとじう抱むたしきよこそ有それと
ねてなしたりおもひしよりもよろぼつり
なるしそれどなぐらりまもてなしてまくらぬ
さ海ましなり衣（源ん）とは月日まそへておぼし
まもどやんごとなきかたの（紫ゆ）おぼつるくて年
月をすぐし給がたぐなしすうちせひなんを給
らんがいと心ぐるしそれがひとりふしがちまて
ゐし給（忘）絵をさ海ぐりきあつめてせふことぐも成
きつけかへりことまくべきさ海まさるしまへり
らん人の心まさめべきものくさ海まりいかでか
そしまうふれ心なるらん二条のきみ（紫）もまれ衣に

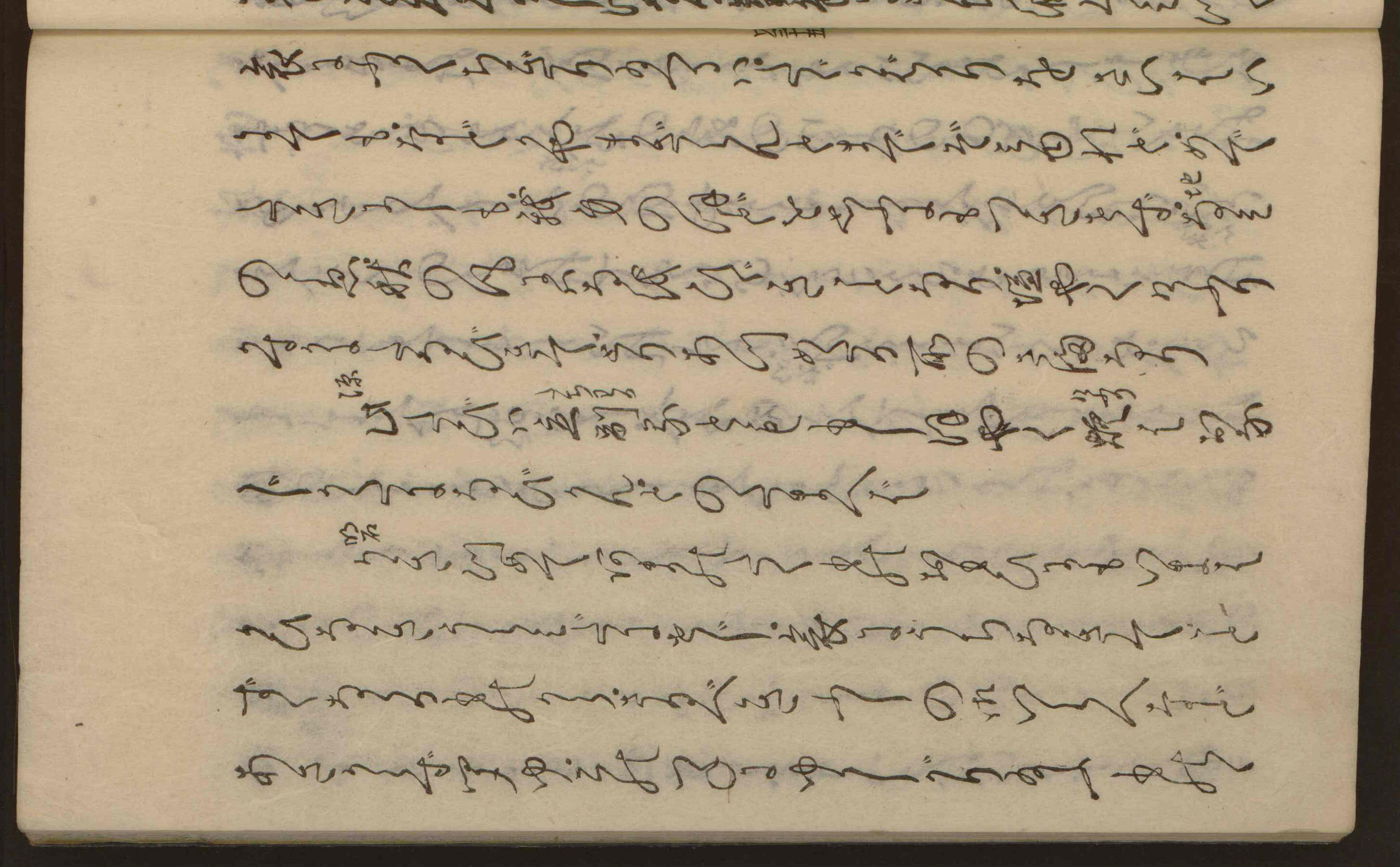
なぐさむかたなくおぼし給ありしおなじやうに
絵(ゑ)をかきつゝめおつゝやがて口がれ有様を日記(しき)ゑ
やうにかきおくりいかなるべきれ有様どもなりか
あらんとしかたりめうちまれくまりのことあ
(源氏七夕)
まて世中さ海ぐにのゝたつとうぐいのことを
女大臣のれむとめ菓(ぜうきやうぞん)香殿(ひげ黒ノいまうとこ)の女れのれりに男みと
むまれおつるふたりになりおへぞいといたけなし
(門ん)長安(ぐ)にしてハゆづり里を給ふめおほやけのれ
うたろこをし世代まつりごりべきへをおぼし
めづすゝこれけんじのかくしげこゝまふこと
はとおくしうおるまじきことなれがつゐる

吾(きぬき)のれいさめ候もそむこさて。ゆりされぬべきさぶ
めむさぬこぞよりこ(恵)さ候もれもれくけまるやこ
めひさ海ぐのもれくさとしさきりさはがしさ候
いこじきれつてさこぞをさ給さるしまやよろさしお
りましけり(清門)れめれるやこさへこのびをもくるしせ
あて。もれこころぼそくおぼされ。それバ七月廿上日の
ほどよ文かきねて京へりくりのべき宣旨(せんじ)くぐるな
つね(添ん)のことをおもひしかどよれつねるさまつけ
てもいかるなりきのべきまかとなげき給をうう
まはかなれバこれしさまつけても文これうしし候
いまことさひとなれんことは候おぼしなげくる。入道

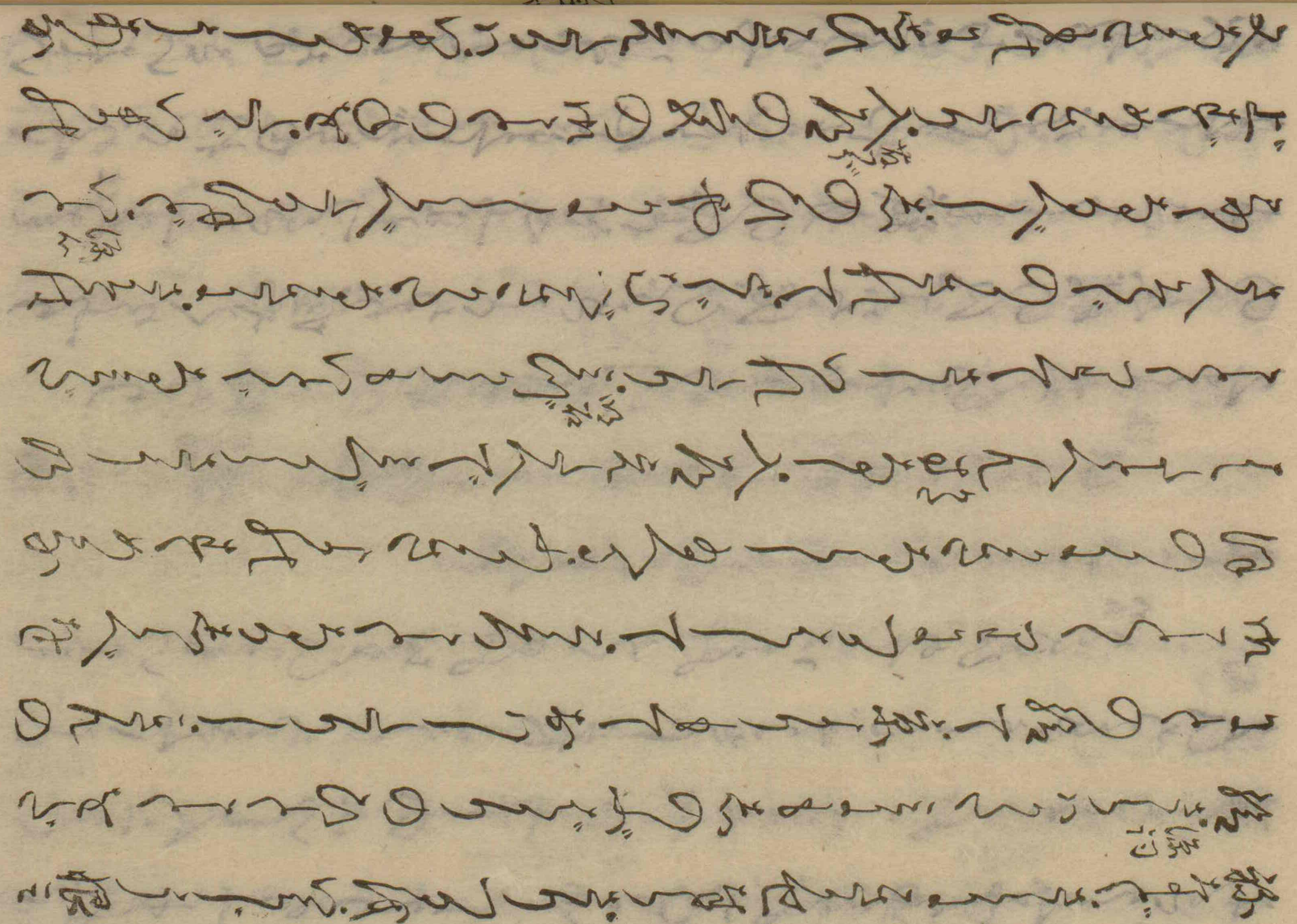
さうべこさことくせひちまぐしうちきくよりむすふる
がりてあばゆれどせひのごとさうへ給はぐこそは
ワがあまひのうちまはあしめなどあまひちなせ。
源 もころはしがれなくくさしひ給。六月づりより心
ぐるしさ氣色なりて 明石上 くるいまんこ 源ん ちやこうぐワれあべき
程なればおやまくちまうまやありけん。なりしより
も衰まあばせておやせうまれせべきまもまを
けうなとあばしこぐり。 明石 女はさしまもいたず思ひ
せばこうい 地 とことちりやせひのほうまうしき
こちまいでこち給しかど。つあまはゆき先ぐり
きちまんとかけはあばしちぐさめきこれこびも

うれしきさくのれいでたちの文やハかりこそ
べきとおぼしき衣なりさふふ人ぐもほどくま
つけてハよろこびも京よりもれむ人ハ人ぐ来り
ゆちよげなる後おるじれ入道なるぞにくれて月も
こちあぼどさへ衣なり宮れ気色ぞ（深ん）ぞや心げから
いまもせてしもすぐろなることにて三後ちぶら
みすんとさ面ぐにおぼしこぶろ。ころろ後志れり
人ぐとおるまく例（人ニん）のれくせぞとこまりむつ
りめり月（源ノ人ニ詞）どろハつ程人にそしきこをず。時ぐ
かいまぎれなどしのへるつれなき後。これどろあや
まくに中々の人の心づくしにとつきしろふ。お（良清）油云

しるべして宮へぞしのびしめれどもすごさくめきき
あくがれはぐずゝずせわりおもきてぞわりはなかるとて。
れいのやうはいひもかさでつかりしまへりぞや
かはもまふこゑめかくちちずいとうしく
さうけくきしさ海そてめぐ海しうも入りける
それとこゝすてぐくちおしうおぼさるゝべき
さ海うてむくんとおぼしなりぬさやうなるぞ
かくひなぐさめ給ふ。おとゞこれかくちち極楽ぞる
さしはもいはず。年比のねがひなりかなひ。いくくお
まやをかなしもうなくめでたきこれ極楽
まてごころがりける気色はうち田ぐ川く。

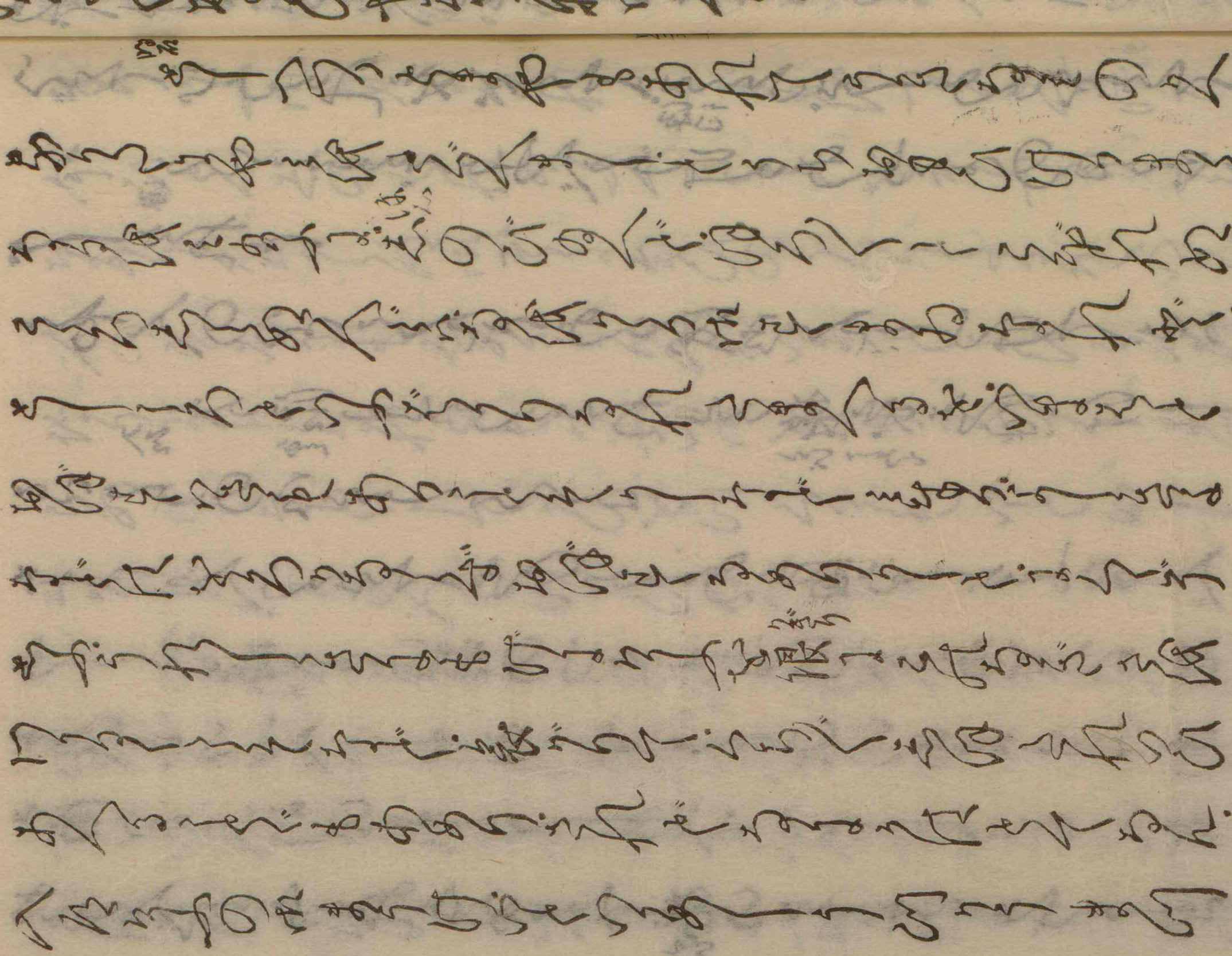


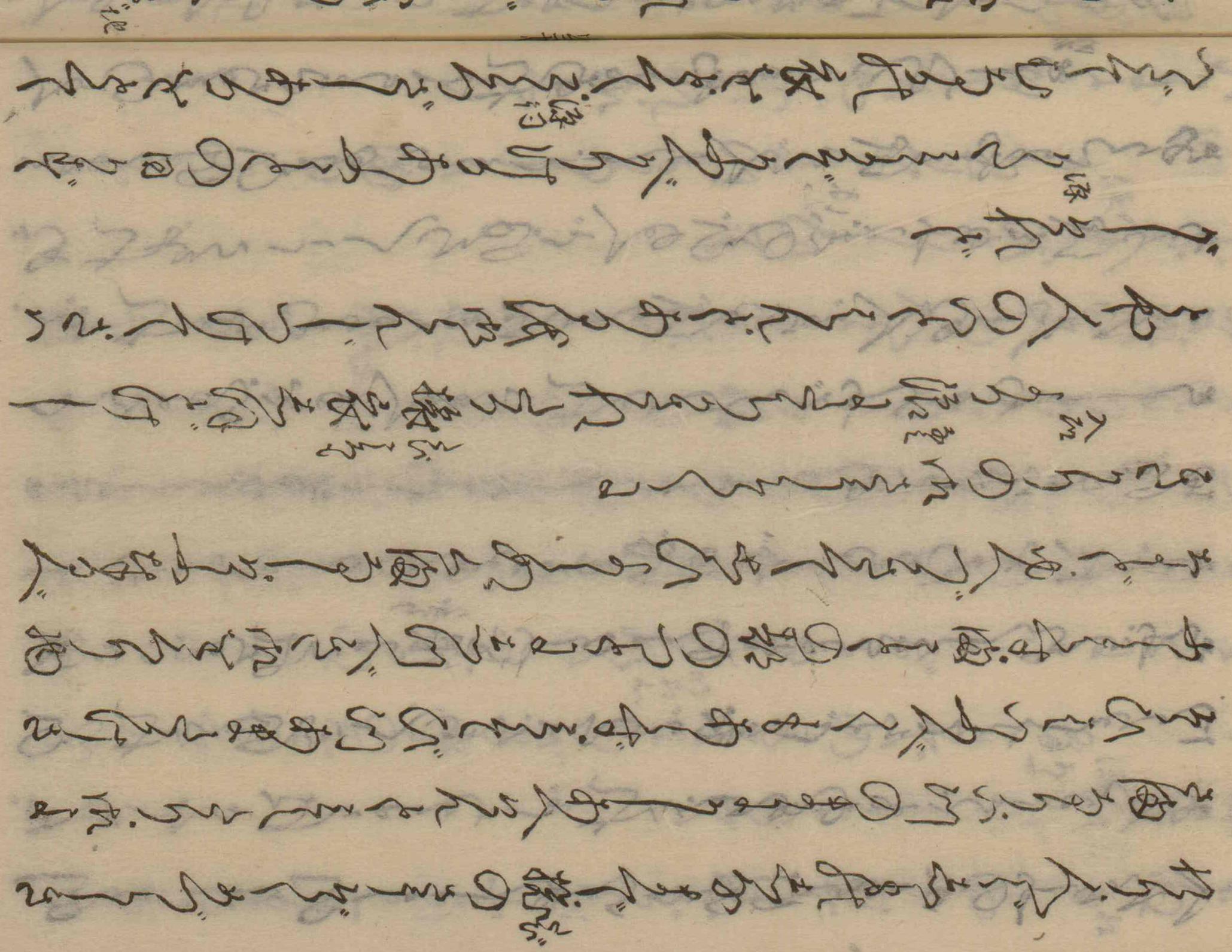
称なすぐさしまさせなしざりつるはいうじう根こ
給ざらはかくこまもしのぶだりのひとことをぞ
（源司）
まとの給て京よりもておりしたりしこさんの
れことくまよつたして、そろことくちろしべを
ほのかまきちらしあへるふきよれまとめか
しまとへんすちし入君えしへでこづらさり乃
ことくまてさしいれしたり、こびかうもいとぐちまる
（明石）
さへそぐのうされてさぐむごきこうちまさまさそは
ふくちるべししのひやうましへうほどいと
（源ん）
上ぎめきたり入君（若つぐ）の夜のれことのもとぐいまれ
又ちきまれましひきえしたりはいまめりしうあか



めでたきさく人の心ゆきてうちさへたひやら
聞ことはげまいとうぶりちきれことのゐなり。こ
れはおくまでひきすまし心まして孫たきねぞ
まきれる。これはころにごまもじめてあれは
なつしうまぶこゝなれはもあてなどころや
ましき程にひきさしつゝあらずおぼさるゝは
も。月ばなどしあてもきくさぐりつゝんと
くやしうおぼさるころのうぶりゆくされのちぶり
をのこし給こさんはまゝうきあはすまでのうこと
にとのこまふ女
なすばざりにこれめをくめるひとことをつま

をぬ春(れ)まやかけて思ぢん。いふともをまさらち
ずさひなどうしこゝのて
(源)あふ
多世までのうちこまちぎる中のをのしらべハ
ことまうつゝざらるん。これ(叩れん)ひこぐらぬさきり
うるしずあひこんとこれこゝのふめりされぞこぐ
ワれんほどのワりなさ浪なりひむをうもいと
ことりなりさら給あるりさハ和ふう出給
てれむ人の人ぐもさはがしそれば心(源)もそらなれ
ど人まれしひて
(源)うちすてしこれもうるしき渦なるこのなぐり
いうまとおもひや家かれ。れかり





なりふ。此男まるれたるども此つかはすげり
今ひとへ志のぞれなかべきことをそふるかこと
なかり。えちるしぬ此ぞるを旬ひのうつりたるを。いかに
人のこころにもしめざらんべきいまいとよ此たるれ
ばりましたるれども。かふの此をくりまつうまい
らめことなどやてかひをけくるもいとおし
なぐしけりさへそけしひぬべし

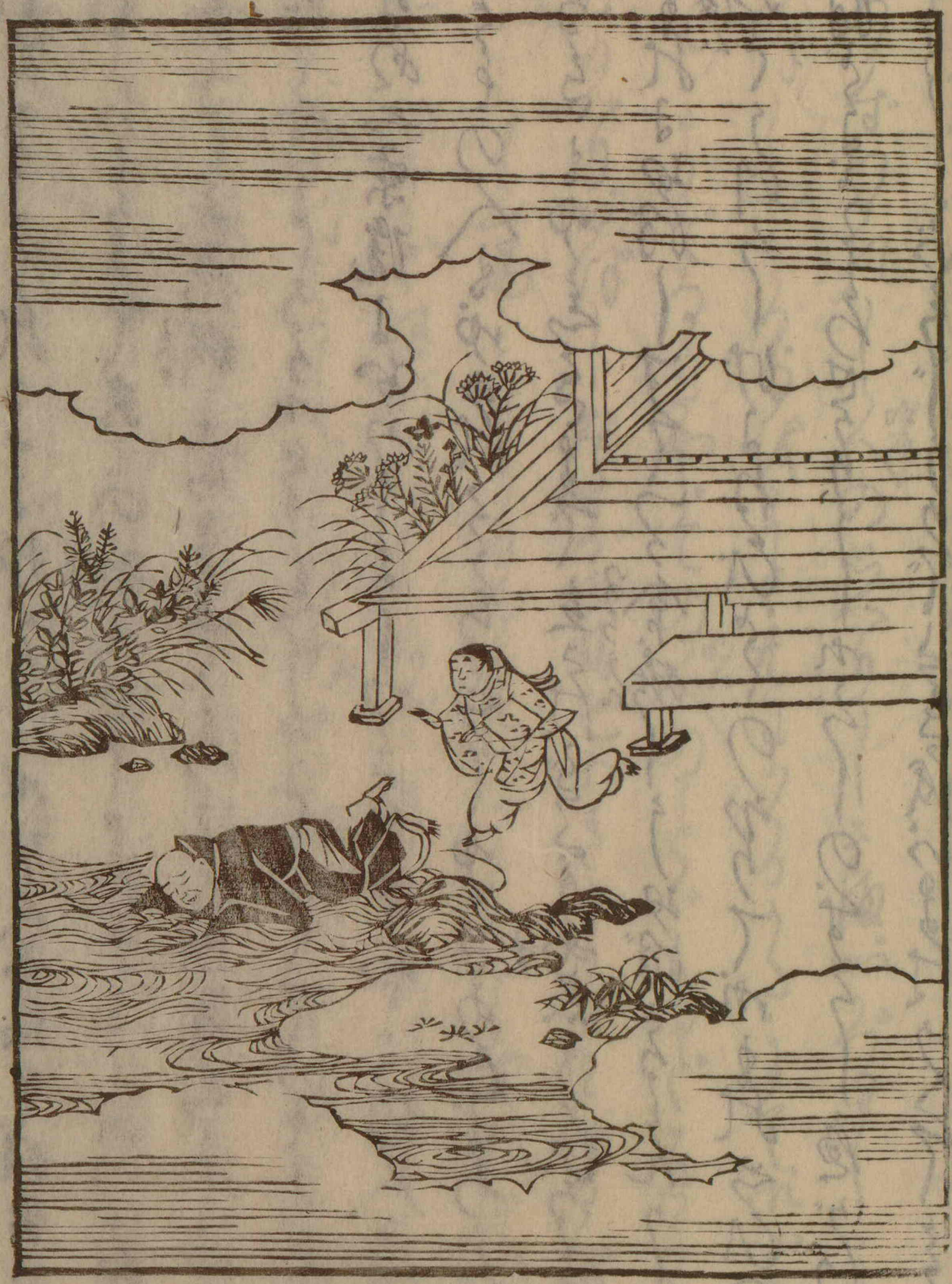
入名
よ此うしまこしたほじむ男となりて此
此者をえしてくるれね心のやこはいとじまかひぬ
べくなれば。さうねまでぐるとゆえて。すきぐしたき
き後なれどなほしいでさせかふあり侍しぐるぐ此

為色給ひ、いとじうもれをあはれとおもして、所ぐ
うちありくあるゝ、まこれ、ひとりなどいたんりる
なくこゝ給、詞はひすてがたきすぢもあめれ、今
いせとくこゝちまし給てんぐ、此すゝかしそこ捨
がたくれ、いりぐすべきとて

添 こゝやこ出し垂のなげきはととしめやとし
あかうし後別ぬり秋どそしのぐひこまへるは
入石 いとぐ抱えしずしほこれまさり、立ねもあさましう
よろばふ、昭石ん ざうじこれてちはさとふべきりなくて、
かうしも人はこゝじとせひ志げ、むれどこれうさ
どもとまてゆりなきとなれどうちすてあへる

恨のやみかくるゝまなき面影をおもひてわすれがたさよ。
さけさへいとゞあはれまさりてめぐりくる君を
あすさへあはでおもひてなほくるしきこゝろづくしうらみこそは
もひそめけんすべてひがごとゝおもひさへまさりしがひ
けふ心のなやましきのでやうおもひやりまほしすら
入念羽
まことにさまでも抱し給めれば、さりともおぼさで所
あはんぜひもなくさめてはゆかしげもなく集れ、おか
ゆくさやそでくるゝすまゝはらおかしげにかたき君
なまじひにあはでたゞころをいひあへるをけしからし
いつでもおのく夜もふけぬと年月をもさしけれ、み
るもいつやもかりもちゝ見えつれ心

ぐるしきことをもまれてくじめるこゝろかなと
なげくをこゝろにもいと（入れん）おしかれば、いとゞぼかられて、
ひるは日ことひいをのこれくらし夜はすくように
おきゐて、ずゞの川来ともしぎなりにかりとて、
ものをなしすりてあふぎゐたり、弟（で）子ぜにはかぎめ
られて、夜夜に出て行道（ぎやうどう）する地はやつこゝづに
こゝれいりにかりぶしありいまれかゝそばたり、
こしもつきそこなひてやこゝしこゝろはどにあ
んずらしもれまぎれける



添
恵はちまたれりたるはわたりて此ゆへ人も給て往吉に
もたいしりて変くの軽(ぐりん)ちたしゆへさうし此つりひ
しそ中させ給織(まハう)に前をうてこゝろは此変えましで
給ちずことろまり此をうしえうまどちまくていそぎ入
なぬ二条院におりしましつきてこゝやこの人も此
ともの人もゆめれこゝちしてゆきあひどろこび
ちまきもゆくしきまで立さはぎたり無恵(法)もかひちまき
もれにおぼしすてつる命嬉(いのちうれ)しうおぼさるゝんりし
添ん
いとうけしげにねびとくのかりて此も此しひの
ほどにどころせうりし此ぐしのすうし色がれ
しうしもいうじうめでこゝ後いまはうくてとろ

なり給つきぐのひとも。さるべきうぶりはもとの
つきうへしたまふよりゆかさるほどかれたり
しまの去まあるこちたて。いとめでたげや。
めしあるとてうちまゐり給おまへまさふひ
みまゐびまきりていりでさるもれむひしき
すまねまさしへ給つんとこまゐる女房などの院の
此時よりさふひておいしらんなどもいりなし
そて。今夏(いまさら)はちきさはぞあで里ゆうへ(清)まちづしう
さへおぼされて。此よりてひたまどことまひきつく
ろひていでおりしまず。此こちれいたまず日どろ
こさせ給されバいたりおとろへさせまへる。此さのふ

なふぞそそうしよろしうおぼされけるに物語しめや
うまなりて。夜にいりぬ。十五夜の月おもしろう
しげうろうる。雪のとくさくづし。忘れて。
しほれさき給。もれ心ぼそくおぼさるゝなるべし。
あそびたまどもをず。すゞしきこしもれねなども
きうで。久しう。夜にけるゝとの給ふすゝる
源 つゝげ海にしげしうしれひるのうれあし
さくざりしさしいへにまなり。とこさくしうまへば。いと 清門
あれに心そづしうおぼされて
清門 家ぞしらめぐりあひけり時しあれば別し
雲のうしとのこすか。いとゝなまめりしきに有信なり。

流のれとめまれ八海をてちゝろんべきこと。まづいそ
がき給。悪家をこなり給ま。ここちなくおよすけさせ給
ひて。めづらしうおぼし悦めへる波。浪なく衣とこ
とてまつり給。れざえもこゝろく海させめて。よ波
とまち給えんまもぐりあるまじくうしこう
えしさせめふ。大臣のこやまもれ心すうしまづめて。
れ對面のほどまもあれたりことぐもあんりし。
波や波明石まれ海の波まつけてれ文つかます。ひき
うしてこまやかまかさ給めり。波のよかくいる
流 親つありしの海に鉦ぎりれとつやと人を
ちひやるかれ肺のむとめれ女節あいなく

人しれぬもれおもひさめぬうこちしてまぐな
ぎりくらをてさしとせり
（五郎）すまれのうらに心とよきしふなべのやがて
くるをり袖をこせだやてちどこよろくまさり
まちりとこおほをめて、つるす
（源）くりていうごとやせましよせうしあはに
袖のひがるうしとあらずおかしとおほしてちぐ
里たれバおどろうされめて、いとぐおほしいげ
れど、これごろいさやうのれふるまひさらにひくこ
めふめり、茶ちる里たまぐまも、しぐれせうそこ斗（だう）
まて、おほつろく中にうしめしげるりとるん

69038
6AP78